

**青春** 春期に人はなぜこんなに悩むのだろう。手をのばしても、つかめない。愛したいのに、愛されない。伝えたいのに、伝えられない。何かをしなくちゃいけないのに、何を、どうすればいいのかわからない。激しいあせりと、もどかしさ。気持ちが強いぶん、拒絶感も強い。はね返そうと、グレしてみても、キレしてみても、答えは出てこない。でもいちばんわからないのは、じつは自分。自分はいったい、何者なのか……。それを求めてもがきにもがいた青春。大正期とは、ちょうどそんな時代だった。

だから大正期は、「自画像」の時代でもあった。岸田劉生や中村舞、萬鉄五郎など、自画像の秀作が数多く描かれている。そして本学には、じつは自画像の一大コレクションがある。西洋画科（現在の油画科）が一九一三年（明治三十六年）から、卒業制作として自画像を提出させたからである。だれの発表で、なぜ始めたのかは、よくわからないらしい。が、いまでは、だれかの個展のときには、最初期の作品として必ず出品される貴重なコレクションだ。その中から、図版には一九一一年代の二点と、その前後の二点を紹介した。

黒田清輝が教室に入ってくると、パイと出ていってしまつた青木繁、福田たねとの熱愛、放浪生活の末の早逝。昂然としてギョロリとした目つきの中に、情動と焦燥が見えてとれる。萬鉄五郎は、フォービズムで知られるが、後期印象派風に描かれたこの自画像には、木村荘八が評した「何となく臆したる差し控えた物腰」の方がピッタリだ。シャレてすました小出権重は、独特のマチエールはそのままに、やがて強い生活感を描き出す。俳優のような佐伯祐三は、パリに留学するが、鋭敏さゆえにやがて精神を病む。

自分を描くことは、こわい。すべてが表われる。内省であれ虚勢であれ、自信であれ不安であれ。でもすくれば自画像は、すべてをさらけ出すから、共感もよぶ。美術と国家を論じた明治に対して、大正期は、個としての美術を追い求めた時代だった。若い画家たちは、「生」と「自己」と「表現」を論じ、激しく燃焼して生きて

東京美術学校1912年

## 青春の「自画像」 情熱と焦燥

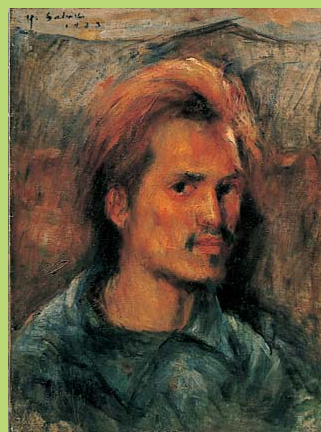
佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 - 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 - 美の政治学』

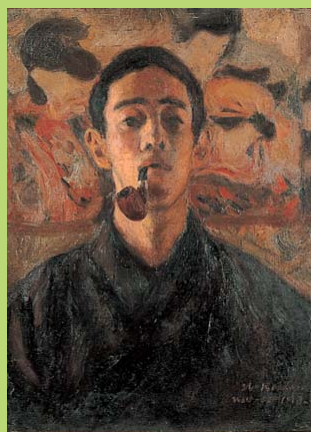


青木繁「自画像」1904年

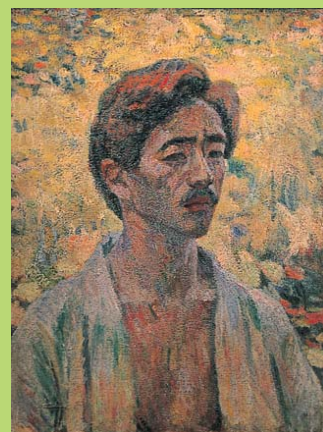
彼らの生涯は、一様に短い。青木二十八歳、佐伯三十歳、萬四十一歳、小出四十四歳。美校以外の作家でも、関根正三二十歳、村山槐多二十三歳、中村舞三十七歳、岸田劉生三十八歳。そのなかに、恋愛、放浪、貧乏、結核、神経や精神の変調などが、ぎゅっしりつまつていた。だれもが通る青春。そしてその青春そのままに、一回きりの短い人生を、激しくかけぬけた彼ら。その切ないほ



佐伯祐三「自画像」1923年



小出権重「自画像」1914年



萬鉄五郎「自画像」1912年

どの純粹さが、見る人の心をゆさぶる。じつさい、よくドラマになる貧しく純粋な画学生のイメージには、大正期の作家のイメージがかなりかぶっている。私たちもそこに、ドラマを見たがっているのかもしれない。でもそれはそれで、いいのではないか。それも芸術機能のひとつなのだから。

(さとう) どうしん/美術学部芸術学科助教授)

# タイムカプセルに乗っ

東京音楽学校1912年

## わが国 オーケストラの父、 ユンケル

瀧井敬子

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋楽草創期の研究）、主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点 - 音楽におけるジャポニスムの一断面」



上：シュトルベルクにあるユンケルの生家。ユンケルの孫／岩倉具一氏所蔵

左：生家前の広場は、「アウグスト・ユンケル・プラッツ」と命名されている。岩倉具一氏所蔵。シュトルベルクの町の地図は、下記のサイトに掲載されている。

<http://www.stolberg.de>



アウグスト・ユンケル (August Junker) 独  
明治32年4月—大正元年12月 (1899—1912) 在任

東京音楽学校オーケストラを指揮するユンケル。ヴァイオリンの最前列に、幸田延と幸田（安藤）幸が並んでいる。東京芸術大学附属図書館所蔵

九一二年（明治四十五年）における指揮を最後に御雇外国人アウグスト・ユンケルが東京音楽学校を去った。彼は一八九九年に採用されて以来、八面六臂の活躍で、音楽学校にいづゆるフル・オーケストラを初めて組織して、シュベルトの《未完成》交響曲をはじめとする管弦楽曲だけでなく、ケルビーニの《レクイエム》やブラームスの《ドイツ・レクイエム》など、管弦楽つき大合唱曲の初演を手がけるまでに育て上げた。その功績は大いに評価されてしかるべきであろう。

ユンケルは一八六八年、北西ドイツ、アーヘン近くの古い町シュトルベルクに生まれた。ケルン音楽院を首席で卒業。在学中、選ばれてブラームスの前でヴァイオリン演奏を披露したほど優秀な学生であった。卒業後は当代随一のヴァイオリニストのヨアヒムに師事。ベルリン・フィルに入団後は巨匠ハンス・フォン・ビューローに推挙され、コンサートマスターにまでなった。だが、一カ所になかなか落ち着かない性格だったようで、ケルン、ポストン、シカゴの交響楽団を首席奏者として転々とし

た。ドイツから楽員を集めるよう頼まれて、シカゴからドイツへスカウトに出かけ、その帰路の船中でドヴォルジャークと会って、親しく合奏をしたことはユンケルの誇らしい思い出の一つになっている。いずれにせよ、彼は音楽家として一流だったのだ。だが、日本のジャーナリズムは彼の能力を正しく理解できず、彼の採用の際にも、また契約更新の際にも嫌がらせ記事を書いていた。そもそも彼を東京音楽学校に推挙したのは、夏目漱石の随筆でも有名なケーベル博士である。ケーベルは東京帝大の哲学教授であったが、若いときはチャイコフスキやN・ルビンシテインに学んでモスクワ音楽院を卒業、優れたピアニストでもあった。横浜の楽器商「デリング商会」で働きながら、慈善演奏会でヴァイオリンをひいたりしていたのを、ケーベルに見いだされたのである。

カンタータ《海道東征》で知られる作曲家の信時潔（信時潔）の在学中の思い出によると、たいていの生徒は「ユンケル先生につかまって何か管弦楽の楽器をやらされた」。ことに管弦楽奏者は当時少なかったため、トランペットやらオーボエやらを勉強させられた。ユンケルは厳しく「ちょっと音程を間違えるな」「You alone（君だけでいい）」と一人ずつ何度でもやり直させ、大声で怒鳴ることもしばしばだったという。

しかし、その一方で彼は合奏の楽しみを生徒に植えた。ユンケル自身、幸田延や安藤幸（ともに幸田露伴の妹）、ヴェルクマイスター、ケーベル等が教室にいるのを見つけると、自分の授業を早く切り上げ室内楽の練習をするほどで、その情熱は生徒にも伝播した。初めて結成された生徒の弦楽四重奏団のチェロ奏者は、幸田修造（露伴の末弟）である。修造が早世すると山田耕筰が後を継ぎ、さらに山田がドイツに留学すると、信時がチェロを担当した。合奏の快楽に取り憑かれた彼らはベートーヴェンの弦楽四重奏曲のすべてをなんとかこなし、ブラームスの三曲はほぼ暗譜したというから、相当の熱の入れようだったことがわかる。

（たきい・けいこ／演奏芸術センター助手）